第489号 昭和61年3月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1986年（昭和61年）
3月号（No. 489）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

日本山岳会の発祥地
広瀬　潔……（1）
公開シンポジウム
ヒマラヤの生態系と環境……（2）
海外の山……（2）
会告　理事会より……（4）
東西南北……（4）
「スリナガルの『カングリ』」他
図書紹介……（5）
「山稜の読書家」「関東の岩場・関西の岩場」「中島文庫目録」「日本の高山蝶」「富士に生きる」
報告……（6）
婦人懇談会，海外委員会，熊本支部会務報告，ルーム日誌，会員移動
……（8）（10）
お知らせ……（8）（11）
「目出帽原価頒布」「岩手支部行事予定」「岐阜支部記念山行」「会員懇談会」「現地小集会と若葉会山行」「マナスル記念トレッキング」「映画会」
図書受入報告　図書委員会……（10）
カット／牧　潤一

▶日本山岳会事務取扱時間

月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

日本山岳会の発祥地

広瀬　潔

私は大正時代に入会してから六十余年になる九十歳の高齢会員だが、その間、腑におちないことがある。それは日本山岳会の発祥地について会員のなかに「東京説」と「横浜説」のふたつあることだ。奇妙な話だ。

（一）東京説の根拠

明治三十八年十月十四日、東京飯田橋の富士見楼で、「創立についての最終決議」が行なわれ、日本橋室町に事務所が設けられたことが根拠になっているらしい。

発起人は、日本博物学同志会員高野鷹蔵、同河田黙、同梅沢親光、同武田久吉、山草会員城数馬、登山家小島久太（烏水）、同高頭仁兵衛の七名だった。

（二）横浜説の根拠

(A)山岳会設立の気運

横浜のキリスト教会に勤めていたウェストン氏は著書の関係で偶然知合いになった小島烏水氏に、「英国同様日本にも山岳会を作るように」すすめていた。

一方それとは別に日本博物学同志会は、従来発行していた会報の「採集紀行欄」が部厚になったので、これを別冊とし、新しく「雑誌」を発行する気運が生れ、横浜港で旅館（高野屋）を経営していた会員高野鷹蔵宅にしばしば集合、協議を重ねていた。（武田久吉氏などは頻繁に東京から出掛けていた由）。

協議の結果、雑誌創刊には登山家も誘うことになって、当時登山紀行文を発表していた小島烏水氏が招かれた。小島氏はその序で、更に一歩進めて「日本山岳会の設立」を提案し、それがいれられてその準備協議会がその後引続き、横浜の高野屋で行なわれていた。

このように「山岳会創立関係者」だったウェストン氏、小島烏水氏、高野鷹蔵氏がいずれも横浜の人だったこと、またしばしば「創立準備会」を開いていた場所が横浜の高野屋だったことなどが「横浜発祥説」を生んだ一因らしい。

(B)「山岳」創刊号の編集と発行

創立直後の山岳会での主要な仕事だったが、編集者も発行者も高野鷹蔵氏だったことも後世「横浜説」が強化されてゆく情勢を生んだらしい。なお編集には、高野屋に近い横浜正金銀行勤務中の小島烏水氏が密接に協力していたことも更に「横浜説」が重視される一因となったようだ。

（注）私は大正時代三井銀行横浜支店勤務の時、高野氏と知合い、同氏の紹介で山岳会に入会し、たびたび高野屋に伺って「山岳創刊号」編集当時の話を聞いたが、あわて者の小島氏は編集打合せの帰りによく旅館の客の靴を間違えてゆくので、高野屋の人々は「小島が来た」と聞くと、警戒態勢に入り、急いで客の靴を片付けたとか。いかに往来が激しかったかがうかがえる。

（注）小島氏は横浜正金銀行退職後、東京の豊年製油重役をされていたが、横浜正金銀行東京支店に来られた時、近くの私の勤め先三井銀行本部に立ち寄られ、三越の食堂で昼飯を共にした。矢張り「山岳」創刊当時の話をされ、編集打合せの件で余り頻繁に高野屋に電話したため、銀行の電話交換手から「私用ですか、公用ですか」と叱られたとのこと。高野、小島両氏の熱中ぶりが目に浮かぶ。

(C)事務所の早期横浜移転

事務所が創立後間もなく横浜に移されていることも「横浜説」の印象を強めている。

元々、当初の東京事務所は形式的なものだったらしい。裏話としては、創立当初山岳会の財政的基盤が薄弱だったので、発起人中では資産家だった城氏に将来に備え期待をかけ、敬意を表する意味で、東京の城弁護士事務所方に山岳会事務所を置いたものらしい。ところが、「山岳」の編集・発行、その他の仕事はほとんど高野氏が高野屋で行なっていたので、東京の事務所を結局横浜の高野屋に移したとか。

(D)発起人の心境

私は、入会後間もなく横浜中華街の中華料理店で開かれた「日本山岳会の有志晩餐会」に出席したことがあるが、その席で世話人の高野鷹蔵氏が「今回は日本山岳会の発祥地横浜でやろう、ということになり、ここを選びました」と挨拶されたのを、はっきり記憶している。

発起人のなかでも代表格だった高野氏がこうした心境だった。「横浜説」の根は深かったわけだ。

（三）発祥地諸説の現況

今回この問題に関心が深いと思われる会員数名（石川治郎、松田

お知らせ電話 234六六五九

雄一、近藤信行の諸氏）に尋ねてみたら、いずれも「東京説」だった。ところが一方で近刊の山岳会会報「山」（昭和六十年九月号）には、「日本山岳会の発祥地を訪ねる」という題名で横浜の記事が載っている。相変らず「東京」「横浜」の二箇所が並列しているのが現状だ。

（四）むすび

私は従来「形式的発祥地は東京、実質的発祥地は横浜」、または「法律的発祥地は東京、歴史的発祥地は横浜」などと言っていたが、心境的には「横浜説」を採っている。

（注）私が大正五年頃、鹿児島の旧制七高に在学していた当時、辻荘一氏が山岳部を創っていた。以後七十年にわたって交際を続けているが、今回改めて確かめてみたら、私と同じく心境的には「横浜説」だった。高齢会員に「横浜発祥説」が多いようだ。

八十周年行事を終り、そろそろ百年史の編纂準備に取り掛かる由。この際こうした問題も一応整理しておいた方がよいのではないか。私としては、「発祥地は横浜」、「設立地は東京」としたら、すっきりするのではないかと思うが、いかがでしょう。

（付）武田久吉氏の熱狂振り

私は早くから集会や事務所で武田氏にお目にかかり、富士見町の同氏宅も訪れていた。また戦後は時どき同氏が拙宅にも来られていた。歓談中、同氏は興奮して山岳会創立発起人のなかでは自分が「主役」だったような口吻を洩されていたが、準備会の席で最初に「山岳会設立案」を提言したのは、小島烏水氏だったのだから、私は「主役は小島氏だった」と思っている。

――公開シンポジウム――

ヒマラヤの生態系と環境

日本山岳会・日本ネパール協会共催

（一九八五年十一月三十日（土）
午後一時半―五時）

一九八四年の科学研究委員会主催のシンポジウム「ヒマラヤのエコロジー」に引続くもので、八五年度は日本山岳会創立八十周年を記念して山岳会の行事として日本ネパール協会と共催でもたれた。

四時間にわたる密度の濃いシンポジウムであった。詳細は当日の録音テープに基づいた記録をパンフレットの形で出版を準備中であ

海外の山

ヒマラヤの冬

ヒマラヤ冬のシーズンが終わった。

一九八五年十二月から八六年二月にかけて十七の登山隊が八千㍍、あるいは七千㍍峰の冬期登頂をめざした。

いくつかの話題を、この中から拾うと、まず、十七隊のうち韓国隊が六隊と最も多かったことである。しかも六隊中三隊が、エベレスト（八八四八㍍）に集中した。

西稜、南西壁、東南稜の三つのルートからで、結果的には東南稜隊の八三五〇㍍が最高到達点となり、他は八千㍍ラインにも及ばなかった。しかし、一つの国から冬の最高峰に、同時に三隊も繰り出すことはかつてなかったことで、このことからも韓国の登山界の意気ごみを感じとれるが、国内では三隊も挑戦して敗退したことに批判の声もあると聞く。

残る三隊は、いずれも六、七千㍍峰をめざした。クーンブ山域のカンテガ（六七七九㍍）隊は十二月三十一日登頂に成功、日韓合同タウツェ（六五〇一㍍）隊は、日本人隊員一人が転落死したあと、一月十二日韓国隊員とシェルパ各一人が登頂、ガウリサンカールをめざした隊も一月十六日、冬期初登をなしとげた。

注目のラインホルト・メスナーは〝十三座目の八千㍍峰〟マカルー（八四六三㍍）に向かったが、北西稜の七五〇〇㍍地点で断念した。七四年、八一年に次いでマカルーへは三度目の挑戦であったが、登れなかった。しかし登れなかったことより「必らず帰ってくる」のが、超人の証明と言うべきか。

いまやメスナーに次ぐ八千㍍・ハンターとして知られるポーランドのイエジ・ククチカは、一月十一日、仲間のクシストフ・ビエリツキとカンチェンジュンガ主峰（八五八六㍍）に立った。世界第三の高峰の冬期初登であり、ククチカは、これで十四の八千㍍峰中、十座をきわめた。また、ビエリツキは一九八〇年二月ポーランド隊がエベレスト冬期初登頂をなしとげた時の登頂隊員で、ヒマラヤの「ビッグ3」のうち二つまでを冬におとした強い男である。

いっぽう日本隊のほうであるが、こちらは、山田昇、斉藤安平のペアが十二月十四日マナスル（八一六三㍍）の冬期二登に成功したほかは、マカルーに西面から挑んだ電々山岳同志会隊が七五二〇㍍で断念、チョモランマ（エベレスト）北壁に再挑戦したカモシカ同人隊は、ネパールからシェルパを連れて、の意気ごみも空しく八四五〇㍍で敗退した。

日本隊の冬期ヒマラヤ登山の挑戦はすでに十五隊を数えるが、登頂に成功したのは八二年十二月の加藤保男のイエティ同人エベレスト隊（下山中遭難）、同じ年ダウラギリI峰の北海道大隊、八三年十二月のカモシカ同人エベレスト隊、そして山田昇らのマナスルと計四隊だけである。

ただ、これは日本隊に限らないが、何をもって「冬期」というのか、もう一度検討されてしかるべきだろう。

漠然とした感じで言うならば、「冬期」とは最も風が強く、寒く、雪も充分に降り積もった季節のことである。冬期登山とは、そういうヤバイ状態の山へ「わざわざ」行くことではないのか。十月とか十一月の秋の山から始まる「冬期登山」報告に時折、面くらわされるのである。（江本嘉伸）

る。なお予稿集は残部が若干あるので希望の方は日本山岳会科学研究委員会宛五百円（切手可）同封の上、申込んで頂きたい。

シンポジウムの司会は昨年に引続き川喜田二郎氏にお願いした。

始めに、特別出席された駐ネパール大使金子一夫氏にお話をお願いした。同氏はネパール政府の政策や外国よりの援助にも拘らず、農業生産が算術平均でみる限り増大していないのは何故かというトニーハーゲンの設問を紹介され、生態学にさかのぼって問題を解明する必要性を強調された。

講師は川喜田二郎、中尾佐助、沼田眞、渡辺桂、渡辺兵力の五氏。以下当日の発言順に拘らず、要約を紹介したい。

中尾佐助氏からは「ヒマラヤの自然保護私見」の題で地球的規模の視野も含めた植物生態系の特徴について話された。ヒマラヤの植物種は非常に豊富で、花も美しいが、多くの植物の開花期はモンスーン中で、登山者の眼にふれていない。一般に熱帯性植物は栽培も容易で、世界的に広く分布しているが、温帯性植物は地域性が強く、栽培も困難である。一方高山植物は世界中で環境が共通で、種類も似ている（日本の高山植物は厳密には高山植物とはいえない）。ところで南半球には北半球でみられるお花畑はないが、このようなことは環境によるのではなく、地質時代によるものである。植物の環境への適応ということはあるが、ある植物がそこにあるかないかは生物地理学（歴史）の問題である。生態系について考える時、環境を読むか歴史を読むかは重要な着眼点である。

沼田眞氏は「ヒマラヤの生態系保全の問題点」という題でネパールヒマラヤとブータンでの生態学的調査見聞に基づいた話をされた。ネパールの調査では原生林は僅かしか残っておらず、自然破壊が深刻なことに驚いた。牧畜の飼料が樹木の葉に大きく依存し、林内過放牧による森林の荒廃が進んでいる。ブータンも人口増加はネパール同様急速であるが、森林保全管理は厳しく、林内放牧は禁止されている。笹型草地で笹を飼料としていることが目についた。

渡辺兵力氏は農業経済学者の立場から「山岳地域の環境論的理解」という題で「環境論」とは何か、いかにあるべきかという問題設定をされ、環境論モデルとして三つの段階、(1)生物主体と生存環境、(2)主体的人間と人間環境、(3)人間環境は自然環境（天然ではない）と文化環境に分けられ、その総合として風土的環境が考えられる。人間の「生活」は自然生態系に基づく「食物連鎖」と文化生態系の「文化連鎖」の二つの回路があること。山地住民にとって自然は生存環境であり、昔から自然保全を行なってきた。一方他所者（異文化の人間）の自然保護意識は山地住民の自然保全意識とは異なる。この異同の解明が当面の課題であろう。

川喜田二郎氏は「環境保全・開発を念頭に置いた文化生態地域区分の必要性」という題でヒマラヤ技術協力会（ATCHA）によるアンナプルナ山腹マガール族集落への技術協力の経験に基づいてつぎの点を強調された。第一に現地の実態を総合的、生態史的に把握すること。それに基づいて生態系の病理の急所を診断すること、地域による生態史的パターンがあること（マガール族の場合は山地で半農半牧、一方稲作上限より低い低山地の場合など）、このような区分は人間とその文化を重視した生態史的パターンである。環境保全と開発にあたっては前に述べた生態史的実情把握に基づくことが重要であることを強調された。

渡辺桂氏は「ネパールの森林と林業」という題で、まず世界的規模での森林減少、とくに熱帯地域の森林減少の実情について述べられた。

熱帯林の減少は年一一三〇万haの割合で減少し、造林面積はその一割に満たないこと。森林減少の原因の最大のものは焼畑移動耕作の拡大であり、休閑期の短縮による環境の不可逆的悪化が発生している。それに続く原因として、薪や家畜飼料の採取。南米では大規模農場牧場の開発がある。ネパールの森林減少は年八万五千haで、アジア最高の年率である。一九七八

山をきれいに ゴミは持ち帰ろう

海外の山

中国陝西省太白山合同登山

京都府は陝西省との友好府省盟約締結三周年を記念し、太白山登山を実行することになった。太白山は近代登山史の中にあっては、一九五六年中華全国総工会太白山登山隊が登頂し、中国近代登山の発祥の山とされている。

太白山は三七六七㍍ではあるが秦嶺山脈の名峰である。京都での記者発表の時に、なぜ高くもない山に登るのかという質問があり、京都北山から私たちがヒマラヤへとはいっていったと同様に、太白山も京都北山と同価値があると答えたが、理解してもらえなかったようである。

小谷隆一総隊長をはじめとして、日本隊員四十名、中国隊員十五名の合同隊が、日中友好を第一の目的として四月二十六日から五月七日まで行動する。

太白山にはパンダ、キンシコウ、クマなどの動物も生活し、自然が豊かな所のようである。残念ながら、私たちは太白山の写真も入手していないし、ほとんど資料もない。西安の碑林博物館の一枚の太白山全国の拓本だけしかない。戦争中に、きっと日本人のだれかが登山していると考えられる。何か参考になる資料があれば教えていただきたい。

外国人に与えられる唯一度の機会であるともいわれている。太白山登山記と山の写真にご期待下さい。

（塚本珪一）

海外の山

年、従来の政府主導型の林業政策が改められ、住民参加を可能とする新政策が打ちだされた。村（パンチャヤット、人口三千―四千人）さらに住民が直接参加できる集落（人口四百―五百人）にまでおろした造林、森林保全政策はFAO、世界銀行、USAIDや各国ボランティアなどの林業援助協力を得て非常に成果をあげている。これらの経験によると、森林の保全、造林の基本は、簡単なことを小さな集落単位で、しかも大規模にやることである。

司会の川喜田氏より四人の発言者に対するいくつかの設問がだされ、問題を深める発言があった。

沼田氏より世界保全戦略（WCS）とそのネパール版ネパール保全戦略（NCS）の紹介があり、(1)造林(2)小規模発電(3)家族計画(4)灌漑(5)土地所有制度改善(6)保健、が重点項目としてあげられていること、潜在自然植生図の作製、木材のみならず水保全、野生動物なども含めた持続的収量の確保の重要性などが強調された。具体的な提案としては中尾氏より放牧に適した乳牛による乳の生産、川喜田氏より日本の農業技術によるネパール低地でのさつまいも生産、沼田氏によるブータンでの魚り食生活への積極的導入などがあった。中尾氏が四枚のスライドにより生態系の保全の多様性を考えることの重要性を強調されたことも心に残った。以上大変充実したシンポジウムであったが会場の時間の制約から参加者の方々からの質問や発言の時間がとれなかったことは申訳けなかった。シンポジウムの後、会場を十階の「吉野」に移し懇親会をもった。

最後になったが今回共催者として特別の労をとられた日本ネパール協会の春田俊郎・静子夫妻、松田雄一氏、日本山岳会自然保護委員会委員長国見利夫氏、理事関塚貞亨氏を始め多数の方々のお世話になり、厚く感謝申上げたい。

シンポジウム参加者

来賓　駐ネパール大使　金子一夫氏、外務省南西アジア課　菊地晶三氏、緑の防衛基金事務局長　中根一郎氏。

講師　川喜田二郎、中尾佐助、沼田眞、渡辺桂、渡辺兵力の五氏。

参加者（順不同）　宇津力雄、中村純二、中村あや、近藤緑、斉藤桂、高遠宏、網倉卓爾、武田勝、安江安宣、松田雄一、神谷光昭、古川紀子、向後元彦、斉藤健治、大森淑子、渡辺喜仁、兒玉茂、山崎健、遠藤光男、今給黎順子、沓沢俊夫、神山眞一、及川昭、松井美恵子、東原実、鳥居亮、山口一孝、麦倉啓、鈴木悦子、浅野賢一、春田俊郎、春田静子、坂本明弘、千葉保之、広羽清、机良子、黒沢秀雄、黒石恒、石井恵美子、三浦幸一、宮本千晴、若林郁子、須田清治、川北弘、武田満子、関塚貞亨、内田圭子、梅野淑子、千葉重美、木名瀬亘、市川義輝、高山龍三、西村政晃、辻井清吾、三沢幸夫、国見利夫、高橋詢

（文責・高橋　詢）

会告

昭和六十一年度より、会員管理コンピュータ化に伴い、会費納入方法を次のようにしますので、会員各位のご協力をお願い致します。

本会より発行する会員氏名・住所が印字され、納入金額が記入された請求書と振替用紙（四連）が各位に送られますので、その振替用紙を用いて最寄りの郵便局または銀行より送金願います。原則として現金での納入は受付けないことになります。

従来、支部経由で納付されていた方も、今後は本会から送られた振替用紙を使用の上、直接本会宛に送金願います。

会費領収書は、振替の領収書を受領書としますので、別に発行いたしません。会員証については別途発行することを検討しています。

理事会

スリナガルの「カングリ」

梅野淑子

日野強の「イリ紀行」に明治時代のカシミールのことが出てくるが、「ここの土人は衣服に綿を入れる法を知らず終始携帯炉を股前に提げわずかに暖をとる活ダルマ」とあるので、その姿を想像しておかしくてたまらなかった。前年の夏スリナガルへ行ったとき、昔はこうだったんですって、と土地の人に言ったら、今だってそうだよと言われびっくり、すぐ見たくなった。

冬のラダックを訪れて零下三〇度の経験もしたくて冬になると出かけた。印度までわざわざ股火鉢見に行くの、といわれながら。

夕方スリナガルに着くと早速街へ出た。いるいる。まさに活ダルマ。皆マントを着て両手は袖を通さずマントの中にそれを持っているらしい。はじめカイロみたいなものをひもでぶら下げるのかな、なんて想像していたが、よく見ると昔の炭かごを小さくしたようなものの中に素焼きの鉢が入っていて、そこに火が灰にうめ込んであり、しっかりあんだ柄を両手で持っている。

この町は回教徒が多いせいか街を歩いているのは殆んど男で、それが皆お腹が大きいのだから一寸異様な光景である。外で遊んでるのも皆男の子で子供達はそれを手に提げ駆けまわっている。カングリというのだそうだが、カメラを向けるとわざわざ出してさし上げてくれる人もいる。ところが街角でスケッチしたら「何で俺のこと

を書くんだ」とつめよって来た。「おなか書いているのよ」と言ったら「オーケー、オーケー」といってくれた。舟や乗合タクシーのドライバー達も皆それを持っていて「ほらあたりな」と貸してくれる。見なれてくると活ダルマもマントをなびかせ吹雪のダル湖畔を走る三輪車の運転手なんかは、なかなかいなせなものである。

それにしても火鉢をかかえて歩くような寒さじゃないと思っているうち、クリスマスに降り出した雪が二日間降り続き、スリナガルの町はすっかり交通マヒとなり飛行機もラダックどころかデリーへも飛ばなくなってしまった。情報伝達の悪い印度のこと、連日つめかける大勢のお客に航空会社は対応できなくなり、各自で判断してくれと張紙を出した。週二便のラダック行きも一週間ねばったが飛びそうもない。たとえ行けても何時戻れるかわからないとのことで、今回は残念だがあきらめ、もう少し早い時期かもっと日数に余裕が出来たらまた来ようと、久し振りに飛んだデリー行きの飛行機に、幸いにも乗れることになり、カングリだけをしっかりかかえて乗りこんだ。

昭和六十年度忘年会

渡辺兵力

恒例の婦人懇談会・集会委員会・総務委員会共催の忘年会が十二月十四日(土)に行なわれた。今年は創立八十周年の行事と重なったために年次晩餐会がないので、会としての文字通りの忘年会ということになった。このところ二、三年出席させてもらっているが、去年よりはややお集りの人数が少ないように思えた。けれど狭いルームでのパーティとしては丁度よい空間があって、お互いの忘年の談笑には好適といってよい混み具合いであった。それから、集まって来られた顔ぶれにも多少のちがいが見られたように思う。年末で若い方々は多忙と思われるが、老会員の中にはこの会を楽しみにしておられる方が少なくないようである。その楽しみの一つが毎回の手造りのお料理である。今年のおでんは大好評の様子。大鍋があっという間に汁だけになった。もう一つ、今年の飲み物は日本酒に統一されて、しかもそのお酒の名の全てが、八海山、武甲山、鬼面山

図書紹介

山稜の読書家

島田巽著

篤学の長老島田さんの、八十歳節目の新エッセイ集である。十年まえの「山・人・本」につづくものだが、読後感はずっしりと重い。随筆と並び堅牢な評論がたくさん入っているせいだろう。山岳名著覆刻の解題四篇、貴重な労作として専門家の注目するウェストン略譜、また「山岳写真の先駆者たち」など得難いものばかりで、初出に目を逸した読者には本著一本に収録されたのが有難い。

とりわけ心に残るのは覆刻の序説「山の本とその時代」である。ルーツ探求は永遠のテーマだが、著者には「書物は時代のなかに生れるが、新しい時代を創るのもまた書物である場合が少なくない」という史観と方法がある。日本の近代登山の発生については多く書かれたが、外国でよく知られているとはいえない。山の文章の一方通行是正のためにもこの明晰で水準の高い評論を、伝統ある外国登山誌に載せたいものだ。評価と反響が必ずあると思う。どなたかに実現をぜひお願いしたい。

評論に気をうばわれたが、随筆随想、人物評書評、書くまでもなく著者薬籠中のもので、何れも面白く巧みで品がある。ただ、個別をとり上げると他の大部に後髪をひかれるので残念乍ら断念しよう。それに代るわけではないが大まかな印象を二点。山単味の前著にくらべたくさん盛られた山以外の随筆から、著者のさまざまな姿と識見を知り得、たとえば若い頃アイルランドの独立運動に共鳴したなど、もの静かな島田さんの思わぬ面にふれた気がして楽しかった。

もうひとつは、数え切れぬほど、著者選択の人物が登場するのに、どの文章からも人物に寄せる著者の愛情と好感が暖かく伝わってくるのが不思議である。日本人、アングロサクソン、また、昔の人でも、本著に活発に姿を見せる戦後の登山家でも、この点全く変りがない。山の世界は国に垣根なく、昔から人間の共有財産だという根っこからの普遍的な国際感覚がないと、このような筆のはこびには至らない、と思う。著者のマロリーの本からも、このような心の姿勢を強く感じたのを思い出す。

本著は私にとって、第一級の山の教養の書である。

一九八五年九月　茗渓堂発行
A5版　三七九ページ　定価三九〇〇円　（田口二郎）

関東の岩場　CJ編集部編
＊
関西の岩場　林　照茂編

七〇年代の後半から、クライマー達の岩の見方が変わり、その登る舞台も変わった。このことを背景として、本書二冊は、困難な岩場へ向うための一ステップとしてのゲレンデではなく、クライミングルートそのものの難しさ、楽しさを伝えようとする。従って、グレードはRCC体系に統一されていず、USAグレード、その他によって表示されているため、旧世代の登山者は少々つかみにくいかもしれない。

「関東の岩場」は三ツ峠をはじめ関東周辺の代表的十八カ所ゲレンデが取りあげられ、それぞれの岩場は、豊富な写真でルート図との対比が容易だ。新しくボルダーエリアとして、御岳、秋川、四方津、シーサイドクリ

といった山名物ばかり（十本）であった。これだけ集めるのも一苦労があったと推察される。この会を準備して下さった会員諸姉に心から敬意を表したい。

会長、副会長がお出でにならなかったので、筆者が開会のご挨拶をすることになったが、その最後に「来年も是非この会を」とお願いしておいた。山仲間のクラブとしてJACの得がたい特色は、老若男女の会員がわけへだてなく集り、語り合い、そして自由に山行を共にできるところにあると確信している一人であるが、この恒例の忘年会は今やJACの一つのシンボリックな会合になってきたように思える。

出席者七十名

ジャヤール氏歓迎夕食会

一月十六日、有楽町の電気ビルで、インド登山財団のジャヤール氏を囲み夕食会を持った。佐々前会長、田口前副会長、大塚副会長など会員多数が参加し、なごやかなひとときだった。

ジャヤール氏はご存じの通り一九五一年のトリスルを始め、カメット、ヌン、クンなどへの登山歴を持ち、現在は森林環境庁と科学技術庁のジョイント・セクレタリーもされている。

ヒマラヤ・スケッチ展

会員牧潤二氏の描いた水彩スケッチ大小約二五点の展覧会です。

場所　中央区銀座三ノ八ノ十五　銀座明治画廊（松屋裏）　電　561－七三八三

日時　三月三十日(日)～四月五日(土)　十一時～十九時、最終日は十八時まで

◇

三つの二十六夜山をめぐる山行

婦人懇談会

平安時代に始まったといわれる月待ち信仰は、二十六夜の月光を拝むと幸福を得るといわれ、江戸時代には隆盛をきわめました。その名残りをとどめる山が、秋山、道志、南伊豆に同名の三つの山として残っています。婦人懇談会の山行として、この三つの二十六夜山を登る企画をたてました。その一番目の報告です。

秋山二十六夜山から寺下峠へ

（とき　昭和六十年十二月七、八日）

婦懇の忘年山行参加者は、七日の夕方、山梨県南都留郡秋山村尾崎の民宿、中旅館に集合した。婦懇の山行に参加するたびに、知人が多くなって楽しい。

民宿の夕食は話題があちこちに飛び、あっという間に時間が過ぎる。大塚さんの山用ニット製品についての経験豊かなお話は、今後の参考になるものであった。

八日は、前夜来の雨があがり、

図書紹介

フ―伊豆城ケ崎―、がまとめられて紹介された。執筆者は、その岩場をよく登りこんでいる若手クライマーなので、各岩場の現在がよく分かる。

「**関西の岩場**」は、お馴染の六甲をはじめ京都、滋賀、小豆島等三十三の岩場が収録されている。関西のゲレンデがこのようにまとめられて紹介されたのは、初めてではないか。写真等体裁は「関東の岩場」と同様。

この二冊は、クライミング・ガイドブックシリーズ全十二のうちの各一冊。現在までこの二冊の外に今脚光を浴びている「アイスクライミング」が発刊されている。全十二冊が刊行されたら、そのルート数、ルートの多様・多彩さに改めて驚かされるであろう。

ともあれハンディな本書達をポケットに、岩を攀じる楽しさを味わいにでかけよう。

八五年六月　白山書房刊　B6版　二二六ページ～二三四ページ　各一二〇〇円

（絹川祥夫）

中島文庫目録

富山県立図書館編

故中島正文氏は、黒部奥山研究の第一人者として知られ、「山岳」に〝黒部奥山と奥山廻り役〟（三二年一号、三三年一号、三四年一号）〝神河内志〟（三六年一号）などを発表している。一昨年生涯をかけて蒐集した蔵書約四五〇〇冊（本書序文による）が遺族から一括富山図書館に寄贈された。同館では中島文庫として保存しその目録として刊行したのが本書である。

巻頭の年譜によると故中島正文氏は明治三十一年十月二十日富山県小矢部市生れ、大正十年関西大学中退、大正十三年六月日本山岳会入会、昭和五十五年四月五日胃癌のため死亡となっている。

本文庫は特色を一口でいえば、黒部、立山地域に関する古文献、資料、古地図絵図、郷土資料の豊富なことで、これを加えたことに依って同館の郷土資料の充実振りで想像出来る。他に山岳書（数は多くないが日本山嶽志から、亡くなる寸前までの新しい本を含む）を始め、俳句、歴史、社会科学、自然科学、工学、産業、芸術、文学、以上に関する雑誌等その収集範囲の広さには驚かされる。

昭和五十九年十一月十七日発行　富山県立図書館刊　一八二ページ　非売品

（岩瀬晧祐）

日本の高山蝶

渡辺康之著

長年に亘り蝶の生態と取組んで来た著者の日本の高山蝶の写真集である。著者は小さい時から蝶に関心をもち、北海道の蝶に対する憧れから大学も北大を選び、アポイ岳で見つかったヒメチャマダラセセリの生態解明調査に加わったことから、それまでの採集主義から生態観察に進んだ。そして大雪、日高、羅臼、日本アルプス、八ケ岳、浅間山系などを訪れて高山蝶の生態を調べた。その一途に打込んだ熱意がにじみ出ている。

カラー図版は北海道産、本州産あわせて十三種の高山蝶の生態写真と、それらの棲む山の写真である。この美しい蝶の姿と、そのドラマチックともいえる一生を克明に撮った写真は、あまり蝶に興味をもたなかった人にも、今度行ったら気をつけてみようという気を起こさせるのではないだろうか。

ウスバキチョウを例にとれば、岩や、コマクサの葉などに産みつけられた卵はそのまま一冬越し、翌年五月に幼虫となり、コマクサを食べて成長し、夏に蛹となってもう一冬を過し、翌年の夏やっと成虫となる。羽化も気象条件によっては一時間以上かかり、さらに数時間してやっと飛べるようになる。しかも美しい紅をちりばめた黄色い翅の色は数日間だけで、あとは白く色あせてしまうという。また、タカネヒカゲは、幼虫の食草が生え、幼虫の

図書紹介

曇天ながら、もちそうである。民宿の夫妻の車に分乗して、浜沢の高金山麓キャンプ場入口で下車する。

登山口から四十分程は、遊びのない直登である。赤鞍ケ岳への路を分けて、少々藪気味の稜線を登ると平坦な植林地となる。稜線どおりに左折し、二十六夜山への標識に従って右折すると、三等三角点のある二十六夜山（九七一・八㍍）である。ガスのため、赤鞍ケ岳の稜線は見えない。昼食には早いので、記念撮影の後、頂上をあとにする。

二十六夜の碑のある平坦地は、詩情を誘う雑木林である。ここで月に豊作を祈ったという古人を偲びながら尾崎へと下る。部落を横切り、秋山川の丸木橋を渡って昼食とする。

寺下峠越えは、昔生活道路として通ったことを実感させる、おだやかなルートである。

日当りのよい枯草の間には、二、三本のリンドウが、まだ頑張っている。寺下峠に着くとガスが切れ、初雪で衣替えした蛭ケ岳、大室山が姿を見せてくれた。

梁川へとのんびり下る。暗い針葉樹の林の中では、小さな灯のような山吹の黄葉が、秋の名残りをとどめていた。

梁川駅では、上り・下り三分ちがいの電車で、またの日を楽しみに、東西にさよならした。

秋山村、道志村は、十年計画という林道開設工事が始まっていた。将来どのように変っていくのだろうか。

参加者　山崎健、松井美恵子、早川瑠璃子、石井恵美子、大塚玲子、里見清子、丸茂キクエ

（**丸茂キクエ**）

海外委員会映画会報告

銀嶺に還えれ

（一九三七年ルイス・トレンカー作品）

昨年十一月十五日（金）にルームで、ドイツ大使館の協力と鈴木理事の尽力により、懐かしい名画『銀嶺に還えれ』が上映されたことに、まず敬意を表したい。

内容は、ドイツの或る山村の、登山とスキーが達者な青年が主人公で、アメリカから来ている彼に好意を寄せる金持ちの女性と雪山に登り、同行した彼の友人のガイドを遭難死させてしまう。失意の主人公は、もう一人陰ながら彼に思いを寄せる村の乙女を振り切って、新天地であるアメリカに渡ってしまう。ニューヨークの摩天楼の中で生活している内に望郷の念が強まり、また故郷に帰って村の乙女と巡り会うというもの。映画の中では雪山登山やスキーレースの場面もあり、オールドファッションを堪能させてくれた。ストーリーとしては、戦後のトニー・ザイラーのものと似ているところも

図書紹介

かくれる石があり、石の下で羽化した成虫が這い出る隙間のあるゴロゴロした岩場に棲む。お花畑に群舞するコヒオドシは、石の下で厳しい冬を過す。自然界の人目につかないところで、このような様々な素晴らしい生が営まれていることに感動する。

その後に述べられている高山蝶の解説及び十三種それぞれにわたる生態概説（付分布図）も興味深い。終りに蝶類の生態観察法を、生態写真撮影法と観察法に分けて記しているが、カメラ、レンズ、フィルム等の機材のえらび方や撮影方法、データの取り方、整理の仕方、蝶の種類や性別の識別法その他、こまごまとした注意が懇切丁寧に記されて、これから始めたい人には良い手引書となるであろう。

B5版　昭和六十年五月三十一日発行　保育社刊　一五七ページ　中カラー図版六四頁　定価四三〇〇円（**中村あや**）

富士に生きる
―十七人の男たち―

寺林　峻著

富士山に関する著書の多い中に富士山を仕事場にしている側から書いている本は珍しい。

富士山を仕事場にしている人と言えば、信仰を支える御師があり山小屋の主人や強力、山案内人があり、浅間神社奥宮の神官、頂上測候所の技官など多くの人がいるが、著者はこの中から大正初期から昭和四十年頃までに活躍した十七人のそれらの代表者を選びだした。いうなれば素手で富士登山を支えた人々なのである。

なぜ昭和四十年を区切りにしたかと言うに、この著書にも書かれているように、昭和三十九年にはブルドーザーが頂上に上がったのである。五合目までのバスはさておき、荷揚げのブルドーザーが頂上に上がるようになっては、強力や荷物を背負う人々は活気を失い多くは転職して去ったのである。

著者は選び出した十七人の人々に思い出を語らせている。それもそれぞれの語り言葉で、さながら私たちを前にして、炉端で火をいじりながら、訥々と語らせている。憎い筆法である。そしてその中に富士登山の歴史がさり気なく盛られているのである。富士山のあれこれに興味を持ち、長い間勉強を続けている私であるが、この著書から得た新しい知識は多かった。

著者はこの十七人を登山口によって大きく分類している。吉田口登山道、御殿場口、富士宮口であるが、私はそこに働く人々の仕事の内容がこんなにも違うとは気がつかなかった。同じように強力と言う呼名をしていながら、大略すると吉田口の人は富士講の人々を無事に登山させるための山案内。御殿場口の強力は四季を問わず測候所のための荷揚げと、技官を無事に冬富士を上下させるためのサポート。そして富士宮口の人は宮強力と言い、浅間神社の本宮から頂上奥社に届け物をする言い換えれば神官の代理のような人。例を強力にとったが、同じ富士山で働く人でありながら、はっきりと仕事が違っていたのである。

内容のある面白い本だった。

著者は第五七回オール読物新人賞の受賞者であるが、著書の中の「たたら師鎮魂」や「立山の平蔵三代」は、登山者の興味をそそる。

B6版　二三九ページ　一九八五年七月　日本経済評論社　定価一六〇〇円（**渡辺正臣**）

図書紹介

あるが、解説の鈴木理事いわくの「村の乙女の場面では、最近忘れられた『はにかみ』という表情をうまく表している」というのが印象的だった。

当日は思わぬ盛況で会員以外の人達も多かった。海外委員会では、今後も機会を見つけて懐かしい名画や珍しいフィルムを紹介していく予定である。

（磯野剛太）

熊本支部新年晩餐会

熊本支部恒例の新年晩餐会は、一月十一日（土）午後六時から、熊本市内のレストラン「ホルン山小屋」で開催され、西沢支部長始め、十九名が出席し盛大に行なわれた。先ず西沢支部長の挨拶、会務報告があり、続いて支部で会員番号がいちばん若い奥野会員の音頭によって乾盃、晩餐に移った。

会場のオーナーである宮崎会員のご好意による豪華な料理の数々に、出席者一同、舌鼓をうつ。賑やかな談笑のうち出席者のメッセージが続き、最後に西沢支部長より、来年の支部結成三十周年記念行事にむけての協力要請があり、一同拍手のうちに午後九時散会した。

出席者　奥野正亥、西沢健一、馬場猛、千代子、宮崎豊喜、多田隆峰、和仁古昇、工藤文昭、大木野徳敏、松本莞爾、菊池更生、門脇愛子、樋口格、洋子、前田辰男、中村恵二、川端浩文、鶴田佐知子、田上敏行　（田上敏行）

会務報告

一月理事会

1月22日　午後6時30分

場所　本会ルーム

出席者　今西会長、山田・大塚副会長、鴫原、橋本、松永、大橋、浜口、梅野、高遠、鈴木、新井、岡沢、長谷川、大森、村木、絹川、平井、関塚、太田各理事、竹田監事、松田、宮下、中村各評議員

審議事項

○京都支部設立について、今西錦司発起人代表より理事会宛文書到着、設立の規定に適合すれば、必要書類提出後、審議し、承認することにする。

○東京農大、中国崑崙山脈最高峰登山の後援について　了承

○会員管理のコンピュータ化に伴う事務処理事項について　了承

報告事項

○増田甲子七会員（元エベレスト登山募金委員長）の死去に対し弔意を表した。

○二月八日開催の支部長会議に提案する会費改訂案（財務委案）を説明。

○海外登山計画が出ているが、この問題は保留、今後検討（日中ネ三国合同エベレスト登山計画）

○各委員会報告

会報に各行事の報告を出すようにされたいとの要請

各委員会の次年度事業計画と予算案の提出要請

ポーランド山岳会交流登山の来日招聘を計画しているので、各位の協力、支部への呼びかけも行なう

マナスル登山30周年記念トレッキングを会員サービスとして企画

ルーム日誌　一月

16日（木）　婦人懇談会
17日（金）　会報編集委
20日（月）　常務理事会
21日（火）　婦人懇談会
22日（水）　理事会、フィルム委
23日（木）　科研委講演会
27日（月）　図書委
30日（木）　総務委
　　婦人懇談会
　　今月の来室者328名

会員移動

物故

9035　岡田市三郎（12・15）
5013　荻野　和夫（11・13）
3221　高野　喜七（1・18）
2615　福井　正吉（1・8）
4453　増田甲子七（12・21）
8436　山田　恵三（1・20）
4740　青木　英治（12・27）
3155　石渡　清（1・3）
2697　岩間　升（10・13）

代表者変更

5127　大阪市立大学山岳部→中井　博へ

改姓

8580　大串　信治→山本へ

退会

8666　福島　光男

2279　井手　貴夫

改姓、夫婦会員へ

7691　田村　協子→五百沢へ

9543　渡辺のり子→大川へ

夫婦会員へ

9277　五百沢智也

9542　大川　英作

眼出帽（めでぼう）原価頒布のお知らせ

スキー。雪山。強風に。薄手。吸湿性抜群（ばつぐん）。ちぢまない。えり巻、帽子、めで帽、と三通りに使用可。ポケットに入るくらい小さくまとまります。

○色　オフ　ホワイト

○一枚　千二百円　百枚限定。

○申込　日本山岳会事務局または海外委員会　早川まで

03-307-1991

＊

岩手支部行事予定

1. 今西錦司元会長歓迎山行

四月二十七日（日）、二十八日（月）、二十九日（火）に穴目山などを予定

2. 春の例会かぬか平山行

●五月三日（土）鱒沢駅十時集合笠通山登山。遠野市の海老藤に一泊、五三〇〇円（三食付、酒代は別）Tel. 0198-62-3059

●五月四日（日）大開山

●五月五日（月）片羽山・雄山（有志のみ）

3. 秋の例会かぬか平山行

九月十三日（土）、岩泉町の大川長崎屋に一泊、四五〇〇円（三食付、酒代は別）

Tel. 0194-26-2005

九月十四日（日）堺ノ神山

九月十五日（月）高峰（有志のみ）

※なお参加者は出発日の二週間前までにハガキで申込み下さい。

＊

岐阜支部15周年記念登山

日時　昭和六十一年四月二十六日（土）～二十七日（日）

宿泊　源屋（みなもと）　岐阜県本巣郡根尾村長島

☎〇五八一三八―二八八六

登山　能郷白山（一六一七メートル）

会費 一泊三食（記念品を含む）九〇〇〇円
集合 源屋 十八時ごろまで
交通 新岐阜発 根尾樽見行（一四時三四分、一五時四九分、一七時三四分）
根尾樽見発 能郷行（一二時三五分、一五時四五分、一七時二〇分）
※岐阜乗合バス（〇五八二―六三―二一二一）、根尾村役場（〇五八一三八―二五一一）へおたずね下さい。
• 参加希望の方は、三月末日までに現金書留にて、会費を左記あてお送り下さい。詳しい案内状をお送りいたします。
連絡先 〒501―11 岐阜市柳戸一番一 岐阜大学教育学部 技術職業科 江馬論（☎〇五八二―三〇―一一一一 内 三三八七）

＊

◉会員懇談会

「東部カラコルム・マモストン・カンリ初登頂の報告会」
日時 四月十五日（火）午後七時より 日本山岳会ルームにて
講師 隊長 尾形好雄
千人の悪魔という異名をもつ東部カラコルム未踏の最高峰マモストン・カンリ（七五一六㍍）に挑んだ日本ヒマラヤ協会隊の貴重な記録を鮮明なビデオ画像とスライドで解説致します。
数々の八千㍍峰登頂で有名な山田昇隊員等の果敢な登攀活動もさることながら、自動車で越える世界最高所の峠カルドン・ラ（五四八六㍍）や、かつての中央アジアへの交易ルートを辿るキャラバンもまた充分に私たちの目を楽しませてくれることでしょう。

総務及び海外委員会

＊

◉現地小集会と若葉会山行

(1) **現地小集会**
日時 四月六日（日）東海道線湯河原駅 九時三十分集合
場所 幕山（六二五㍍）
歩行時間は三時間
春を愛でる山行。春の草原の山をひばりの声を聞き、光る太平洋を眺めながら登る。山腹に幕岩がある。ご家族の方もおさそい下さい。

(2) **若葉会山行**
集会委員会恒例の若葉会山行を今年も左記の通り行ないます。皆様の多数ご参加をお待ちしております。
日時 六月十四日（土）～十五日（日）
場所 苗場山（二一一四五㍍）
Aコース 和田小屋～苗場山～小赤沢（歩行約八時間）
Bコース 越後湯沢よりマイクロバスにて小赤沢まで入り、苗場山に裏側より途中まで登る。
集合解散 十四日午前七時越後湯沢駅前集合、十五日朝現地解散
参加費 九千五百円
今回は十回目を迎え、小赤沢温泉にて盛大な懇親会を計画しております。参加希望の方は事務局までAコース、Bコース別も併せてご連絡下さい。
なお、前日十三日（金）越後湯沢にて宿泊（素泊り三千五百円）の希望者は宿のご用意（辨当実費）を致しますのでその旨もご連絡下さい。

集会委員会

お知らせ

マナスル登頂30周年記念トレッキングへのお誘い

一九五六年五月十一日、本会の登山隊（槇 有恒隊長）がマナスルの頂を極めてから、今年で三十年の歳月が流れました。その間に日本と世界の登山界は大変な発展をしましたし、世界情勢の変化から、誰もがヒマラヤの山麓を訪れることが出来るようになりました。本会でもマナスル登山の後に幾つものヒマラヤ登山隊を組織し、数多くの成果を上げてまいりましたが、その原点となるものは、やはりこのマナスルを置いて他にないと考えます。
本会では、80周年事業の行事のひとつとして行なった昨年の中国黄河源流のトレッキング隊に引き続きまして、会員サービスの一環として、このマナスル峰登頂30周年を記念するトレッキング隊の隊員を募集しますので、この会報を通じて広く会員の皆様に呼び掛けたいと存じます。
ブリガンダキ河流域のサマ村を中心とするマナスル東面のトレッキングは、いまもって一般の旅行者には開放されていませんが、今秋、本会の会員を対象に実施することが可能になりました。幸いなことに現会長はマナスル峰の初登頂者でもありますし、この機会を通じて会員相互の親睦とネパールの山岳関係者との友好を、より一層深めることが出来るものと存じます。
つきましては、左記の要領で募集・ご案内をしますので、ご家族やお仲間をお誘いください。

記

期日・コース・募集定員、および予定参加費用
一、本年十月三十一日（金）～十一月九日（日）十日間 二十名
マナスル展望の山旅 約三四〇、〇〇〇円
二、本年十月三十一日（金）～十一月十四日（金）十五日間 十五名
サマとマナスル峰ベースキャンプ探訪 約四五〇、〇〇〇円
三、本年十月三十一日（金）～十一月二十一日（金）二十二日間 十名
マナスル一周の山旅（ラルキャ・ラ峠越え）約四九〇、〇〇〇円
募集対象 本会会員、会員家族、会員友人（但し会員友人は二五、〇〇〇円参加費用が高くなります）。
申し込み方法 本年四月一日以降、日本山岳会本部事務局に詳細案内と申込用紙を用意しますので、便箋に住所・氏名・電話番号・会員番号等を記入のうえ、送料分一七〇円切手を同封して封書でご請求下さい。申し込みの締切は本年九月初旬を予定しています。

（海外委員会・鈴木郭之）

図書受入報告

図書委員会

昭和 60 年 5 月分受入図書

1. ジョン・チンダル著「アルプスの氷河　第1部」岩波書店 1939（鳥居亮氏寄贈）
2. ジョン・チンダル著「アルプスの氷河　第2部」岩波書店 1937（鳥居亮氏寄贈）
3. 山村正光著「車窓の山旅・中央線から見える山」実業之日本社　1985（版元寄贈）
4. 澤頭修自著「御嶽の見える村・木曽開田高原日記」実業之日本社　1985（版元寄贈）
5. スーパーガイド・アジア編集部編「スーパーガイド・アジア⑦　中国・北京編（シルクロード・黄河・東北）」JIIC 出版局　1985（増島達夫氏寄贈）
6. 斎藤清子著「おかあさんは今，山登りに夢中」山と渓谷社 1985（版元寄贈）
7. 中島博著「カンテラ日記　富士山測候所の五〇年」筑摩書房 1985（金坂一郎氏寄贈）
8. 日本山岳会東海支部編「東海山岳　No. 5」日本山岳会東海支部　1985（版元寄贈）
9. 東京辿路山岳会編「われらの軌跡　山岳会に生きた五十年」東京辿路山岳会　1985（版元寄贈）
10. 坂倉登喜子著「エーデルワイスの詩」茗渓堂　1985（坂倉登喜子氏寄贈）
11. 神憲明著「穂高は生きている」じゃこめてい出版　1985（版元寄贈）

6 月分受入図書

1. 大内尚樹　新隆浩共著「登山入門シリーズ 2　夏山の基礎技術」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
2. 平野與三郎著「山人の賦　II」白日社　1985（版元寄贈）
3. 花畑日尚著「日本の名峰　22　槍・常念・燕岳」山と渓谷社 1985（版元寄贈）
4. クライミングジャーナル編集部編「Climbing Guidebooks 4　関東の岩場」白山書房　1985（版元寄贈）
5. 林照茂編「Climbing Guidebooks 9　関西の岩場」白山書房　1985（版元寄贈）
6. 井出孫六著「峠　はるかなる語り部」白水社　1984（版元寄贈）
7. 串田孫一著「岩波グラフィックス　30　上高地」岩波書店 1985（版元寄贈）
8. 浅野孝一他著「関東百山」実業之日本社　1985（版元寄贈）
9. 増永迪男著「取立山・しらやま考」品川書店　1985（増永迪男氏寄贈）
10. 寺林峻著「常民叢書 4　富士に生きる，17 人の男たち」日本経済評論社　1985（寺林峻氏寄贈）
11. 石上隆章著「六甲の谷と尾根」やまゆき会事務局　1985（石上隆章氏寄贈）
12. 久保田展弘著「山岳霊場巡礼」新潮社　1985（版元寄贈）
13. 池田光雅他著「アルプス登山鉄道」新潮社　1084（版元寄贈）
14. 穂苅貞雄著「私の槍が岳」朝日新聞社　1985（版元寄贈）
15. 北海道大学山岳部山の会編「ダウラギリ I 峰厳冬期初登頂報告書」北海道大学山の会　1985（版元寄贈）
16. 渡辺康之著「日本の高山蝶」保育社　1985（版元寄贈）
17. 布施正直著「お花畑高山の花々」保育社　1985（版元寄贈）
18. 浅見明博　堀田明著「富士の鳥」保育社　1985（版元寄贈）
19. 市根井孝悦著「日本の名峰 2　大雪・石狩・十勝」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
20. 仁藤祐治編著「岳麓漫歩 7　富士山百一年」悦声社　1984（麻生武治氏寄贈）
21. ЗАМЯТНИН “ЭВЕРЕСТ; Югозапад ная стена” Пениздат 1984（購入）
22. 金在澤「山岳스키」韓国山岳會仁川直轄支部　1984（金在澤氏寄贈）
23. C.S. Houston “High altitude physiology study; collected papers” Arctic Inst. of North America 1981

（以下次号）

JAC70周年記念出版として好評10年…この機会に山の古典を味わってみませんか！

覆刻 日本の山岳名著
全18点22冊
解題書・特別資料付
企画・編集／日本山岳会
現金価格190,000円

日本風景論 志賀重昂
日本山嶽志 高頭 式編
日本アルプス 全四巻 小島烏水
アルペン行 鹿子木員信
日本アルプスと秩父巡禮 田部重治
山 行 槇 有恒
黒部谷 冠松次郎
山—研究と随想 大島亮吉
山と雪の日記 板倉勝宣
雪・岩・アルプス 藤木九三
尾瀬と鬼怒沼 武田久吉
スウィス日記 辻村伊助
ハイランド 辻村伊助
氷河と萬年雪の山 小島烏水
北の山 伊藤秀五郎
山岳省察 今西錦司
Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps
日本アルプス登山と探検 ウォルター・ウェストン
別巻 山の憶ひ出 全二巻 木暮理太郎 新装増補版
●解題書 覆刻日本の山岳名著解題 日本山岳会編
●特別資料 日本山岳会「會報」覆刻合本 第一号～第一〇〇号

新選覆刻 日本の山岳名著
全20点29冊
解題書・特別資料2点付
企画・編集／日本山岳会
現金価格175,000円

名山圖譜 全三巻 谷文晁
迦多賀嶽再興記 播隆上人
信州鎗嶽畧縁起 播隆上人
石狩日誌 松浦武四郎
山岳紀行六種（私家版） 松浦武四郎
乙酉掌記 他五種
歐洲山水奇勝 全二巻 高島北海
富士案内 野中至
西蔵旅行記 全二巻 河口慧海
山水無盡藏 小島烏水
ヒマラヤ行 鹿子木員信
劍澤に逝ける人々 東京帝國大學山の會編
山岳美觀 吉江喬松
山の繪本 尾崎喜八
先蹤者 大島亮吉
白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊編
アルピニストの手記 小島烏水
ナンダ・コット登攀 竹節作太
山に描く 足立源一郎
Playground of the Far East ウォルター・ウェストン
山岳礼拝（新編集） 中村清太郎
●解題書『新選覆刻日本の山岳名著解題』 日本山岳会編
●特別資料[1] 日本山岳会『會報』第一〇一号～第二〇〇号
●特別資料[2] 播隆上人筆『鎗ヶ嶽繪圖』

大修館書店
●内容見本呈
〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替／東京9-40504 電話(03)294-2221〈大代表〉
在庫僅少！

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9 電話03(813)4651(代表)

山

山を愛し，山を仕事とするものたちの
熱い思いを綴った"山の讃歌"

山を仕事の場，あるいは仕事の対象としている人たちが山へのかかわり方，山の愛し方，熱い思いをさまざまに描く。"人はなぜ山に登るのか"という永遠のテーマに新しい角度から応える"山の讃歌"。

生きる，学ぶ，探る　46判・1300円

近藤 和美（『山と仲間』元編集長）
小宮 昌平（経済学）

相田 孝作（焼岳監督官）
青野 恭典（山岳写真家）
井出 良二（長野営林局臼田営林署）
伊藤 正一（三俣山荘経営）
大森 昌衛（地質学）
小川 潔（植物学）
織田 博志（アルパインガイド）
梶田 民雄（梶田製作所）
勝野 銀一（北アルプス遭難救助隊）
河野 広茂（富士山測候所）
木村 靖郎（山梨県林務部）
熊谷 樫（画家）
倉持千佳子（竜山村森林組合）
桑原 清（アルパインガイド）
節田 重節（『山と渓谷』元編集長）
高橋 和之（カモシカスポーツ）
田中 澄江（劇作家）
千葉 彬二（カモシカ研究）
手塚 宗求（車山ころぼっくるひゅって経営）
永田 秀樹（『岳人』編集部）
中村 一武（唐沢鉱泉マネージャー）
西村 武二（林学）
新田 隆三（雪崩研究）
原 真（医師）
本多 勝一（新聞記者）
松田 彊（林学）
松葉 豊（画家）
松本 徑夫（火山研究）
宮野 典夫（ライチョウ研究）
森田 千里（中学校山岳部顧問）
森本 録郎（北岳肩の小屋経営）
山田 明（国土地理院測地部）
吉住 友一（高校山岳部顧問）

映画と講演会のお知らせ

「穂高は生きている」の上映と製作者 神憲明氏のお話

●四月二日（水）十八時三十分よりルームにて

※なお会員価格でこの映画のビデオテープを当日希望者に頒布致します。

自然保護委員会

編集後記

「一九八五年の海外の山」、「ヒマラヤの冬の風」について、執筆者や編集者宛に良かったというお便りを頂いた。

▼誰もが一生懸命（時には手も抜くが）ボランティア活動をしているわけなので、ちょっとした励ましの一言も、単純なわれわれは心踊らされるのである。「アハレトイフモ中ナカヲロカナリ」で、「無常ノ風キタリヌレバ・・・桃李ノヨソホヒ」たちまちに失せるに違いないのだが・・・。

▼「・・・、ケフトモシラズアストモシラズ。」せいぜい任期のある間は頑張ろう　（O）

昭和六十一年三月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五—四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三—四八二九番
東京都港区六本木三ノ一ノ三〇 ABビル
印刷所 株式会社 技報堂